

2024年1月31日

2023年度聖路加国際大学大学院
看護学研究科課題研究

後天性障害を持つ子どもの親の心理的適応に影響する
気づきと体験に関する文献検討

Awareness and Experiences Affecting Psychological Adaptations of Parents of
Children with Acquired Disabilities : A Literature Review

21MN305

佐藤未沙規

要旨

目的：後天性障害を有する子どもと親についての先行研究から、親が子どもの障害そのものの存在や、障害を持つ子どもとの生活において、親の心理的適応に影響する気づきと体験について明らかにする文献レビューである。

方法：医学中央雑誌 Web を用いて検索し、後天性障害を有する子どもの親の体験について記述された文献の中から、コードを抽出し、サブカテゴリー、カテゴリーに分類した。

結果：7 件の文献から、217「コード」、35〈サブカテゴリー〉、9【カテゴリー】が抽出された。親子の体験は【心の準備なく子どもの命の危機と向き合う】ことから始まり、親は混乱を極める状況で、子どもの救命を第一に願い、変わり果てた子どもの姿と対面した時からどんな状態でも受け入れる覚悟をすると同時に、元の姿に戻ることを期待していた。医療者から得られる子どもの情報に右往左往していたが、視覚的に子どもの変化を認識し、医学的な情報を得ながら理想と現実の隔たりを実感して【子どもに障害がある現実との対峙】をした。子どもの障害に対する葛藤を抱えながらも、【親役割を模索し、子ども中心の生活】を送り、親として子どものためにできることを尽くした。子どもの状態が安定すると【子どもと一緒に暮らす心構え】が高まり、在宅での生活を希望した。【子どもとの生活を通して得た体験】では、実際の生活の中で生じた困難やジレンマが明らかになったが、社会資源を活用して介護と育児の調和を図り、新しい養育方法を調整した。【社会との関わりを通して生じる思い】では、ライフステージの節目に健康だった頃と同級生など他児との比較することで、子どもの障害が強調されていたが、同じような障害を持つ子どもや親との出会いは、孤独から開放され良き理解者を得る体験となっていた。生活経験の積み重ねによりケアのスキルが熟達し、子どもの反応を複合的に判断できるようになると、自分なりの養育スタイルを築き【生活経験の積み重ねによって獲得した強み】を育んだ。障害を持つ子どもの育児を通して得られた有能感は親が社会進出する原動力となり【障害を持つ子どもを育てる親としての成長】がみられた。一方で、一連のプロセスの中で自責の念や受傷時の消せない記憶が時期を問わずして語られ、それらは親が【ずっと向き合い続ける思い】であった。

結論：後天性障害を有する子どもと親は、子どもの突然の受傷や発症を契機に、子どもの命が危機的な状況に陥るだけでなく、親子の関わりや積み重ねてきた日常も喪失する体験をする。子どもに関する情報に対する受け止めの質を高め、適応的な行動へと価値を変換し、新たな日常を築いていくためには、生活上の気づきや体験を積み重ねることで親の主體的な行動を導く必要がある。